

星の国から 孫ふたり

～「自閉症」児 の 贈りもの～

参考資料

企画・製作・配給



企画制作

パオ

(有)

『星の国から孫ふたり』製作委員会

【企画意図】

企画製作・監督 槇坪寿鶴子

パオ代表・監督 「星の国から孫ふたり」製作委員会代表

発達障害って知っていますか？

その中の「自閉症」(オーティズム)を知っていますか？

「自閉症」は生まれながらに脳機能に障害があり、人とのコミュニケーションが困難です。しかし早期発見・早期療育によって障害は軽減可能です。

人は地域の中で、様々な人とふれ合い、支え合える環境があれば、障害があるなしに関係なく、"その人らしく生きること、成長つづけることが、夢ではない"と信じています。

映画『老親』の原作者・門野晴子さんのお孫さん二人(アメリカ在住)が「自閉症」です。その実体験から書かれた「星の国から孫ふたり」を読み、ユーモア溢れる愛情一杯の関わり方に感動しました。日本の現状に置き替えて、「自閉症」児と家族、療育者と教育現場のあり方を見つめ直したいと思います。

映画『星の国から孫ふたり』は、笑いあり涙あり、夢のある愛ある世界に皆様をご案内することでしょう。この映画が「自閉症」(オーティズム)への理解を深めるきっかけになりますように。

原作 門野 晴子

『星の国から孫ふたりーパークレーで育つ「自閉症」児ー』（岩波書店刊）

『ギフトィッド・チャイルド～「自閉症」児からの贈りもの』（十月舎刊）

重い障がいを生きる榎坪監督が、拙著の「星の国から孫ふたり」を映画化するのがとてもうれしい。

いわゆる障がいものには絶対ならない監督の人間観が、「面白くて可愛い不思議な生きもの」に映像の息吹を与える楽しみ。実際の私の孫たちは米・パークレー市に住む日米ミックスの異星人だが、映画では日本人に置き替えたことでよりリアリティを帯びた。不思議ないのちがりのままの個性としてこの国に受容される日まで、私も監督もはたして生きていられるや否や？

脚本 下島三重子

「母のいる場所」脚本

孫ふたりが「自閉症」だった！ 星の国から来たような孫たちと、コミュニケーション獲得のためのバアバの奮闘記。未知なる世界を知り、そこに寄り添うことで、ふれあう魂。涙が笑いに、苦しみが喜びに変わる。今や、異星語も解せるようになったバアバは怖いものなし！

「自閉症」を取り巻く現状

平成17年4月1日、発達障害者支援法が施行されました。

支援法の定義で「発達障害」とは、自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるものをいう、とあります。全国に発達障害センターもおかれはじめ、支援体制は整いつつあります。しかしながら、まだその機能が十分に発揮されているとは言えない現状です。

【賛同者（応援者） 27名の方々】

※敬称略、五十音順

- 赤松 彰子 (里の家・助産院)
- 秋元 良平 (盲導犬クィールの写真家)
- 有馬 百江 (NPO集合住宅管理組合センター理事)
- 五十嵐愛子 (新潟青陵大学准教授)
- 岩城 隆就 (シルバーヴィラ向山・アブランドル向山社長)
- 岩淵 秀夫 (日本自閉症協会会員、十月舎・増永)
- 梅村 康有 (株六甲出版販売 代表取締役)
- 川名はつ子 (早稲田大学教員)
- 鎌田 真澄 (リウマチ友の会愛知支部長)
- 菅野 クニ (元保健師、チーフプロポーションカウンセラー)
- 木島 知草 (ひとり人形劇・がらくた座主宰)
- 小島 正美 (毎日新聞社東京本社生活家庭部編集委員)
- 河野美代子 (河野産婦人科クリニック院長)
- 後藤 節子 (秋田児童館館長、あきた子どもネット代表)
- 坂巻 克巳 (岩波書店・編集者)
- 武田富美子 (日本赤十字北海道看護大学教員)
- 千場 純 (横須賀市医師会 理事)
- 堤 興亞 (一級建築士 (株)ベルプランニング社長)
- 徳永 瑞子 (アフリカ友の会代表 聖母大学教員)
- 久田 恵 (「母のいる場所」原作者、ノンフィクション作家)
- 蛭川 克 (北野同窓会71期有志代表)
- 福原壽万子 (医療法人社団文寿会 福原病院・理事長)
- 藤元眞紀子 (社会福祉法人いきいき牧場 理事)
- 松井 寛子 (おふいす風まかせ)
- 松本侑壬子 (映画評論家)
- 村瀬 幸浩 (一橋大学・津田塾大学講師)
- 米倉斎加年 (俳優)

【支援・協力】

映画『星の国から孫ふたり』実行委員会運営の支援協力サイトにて、＜目標1万人賛助！＞と題し、製作協力金のカンパ、映画チラシの宣伝配布、自主上映会の企画による支援、協力を募っています。

現在の協力金 9,255,000円

(2009年6月23日現在)

- ・協力金カンパいただいた個人の方々 354名
- ・協力金カンパいただいた団体・法人 15社
- ・チラシを配布して下さった方々 63名
- ・自主上映会を企画 13ヶ所

秋田「星の国から孫ふたり」上映会、盛岡「星の国から孫ふたり」上映会、原町「星の国から孫ふたり」上映会、日進市「星の国から孫ふたり」上映会、三木市「星の国から孫ふたり」上映会、神戸市「星の国から孫ふたり」上映会、特定非営利活動法人あきた子どもネット、福井県高齢者の人権を守る市民の会、昭島市「星の国から孫ふたり」上映会、横浜市「星の国から孫ふたり」上映会、その他

クランクイン後も引き続き、資金協力・上映協力・宣伝協力をお願いします

【特記】

社団法人企業メセナ協議会認定（税金控除）

助成：文化芸術振興費補助金

【上映スケジュール】

2009年4月1日（水） クランクイン

8月6日（木） 完成予定

9月2日（水） あいち国際女性映画祭2009（プレミア）

ー9月より全国上映ー

【楨坪寿鶴子プロフィール】



1940年
広島に生まれる

1964年
早稲田大学第一文学部演劇科卒業
映画・TV・教育映画に18年間
スクリプターとして参加

1985年
企画制作パオ設立
翌年有限会社として登録
代表取締役となる

子どもたちへ

～いのちと愛のメッセージ～ 86年度作品

製作・監督
文部省特選
55分ドラマ

若人よ

～いのちと愛のメッセージ～ 87年度作品

製作・監督
厚生省推薦
105分ドラマ

地球っ子

～いのちと愛のメッセージ～ 93年度作品

製作・監督
芸術文化振興基金助成作品
厚生省中央児童福祉審議会児童文化財推薦
83分ドラマ

わたしがSUKI 98年度作品

製作・監督
厚生省中央児童福祉審議会児童文化財推薦
財団法人エイズ予防財団推薦
法務省／東京都衛生局薬務部協力
86分ドラマ

老親ろうしん

2000年度作品

製作・監督
東京都女性財団助成作品
第17回山路ふみ子映画賞福祉賞
第25回日本カトリック映画賞
第20回藤本賞特別賞
Japanese Film Festival in Chicago '03 出品
112分ドラマ

母のいる場所

2003年度作品

企画製作・監督・脚本
第16回東京国際女性映画祭出品
116分ドラマ

星の国から孫ふたり

～「自閉症」児の贈りもの～ 2009年度作品

企画製作・監督
あいち国際女性映画祭出品
95分ドラマ

【解 説】

発達障害支援法が2005年4月1日から施行（しこう）されました。

原作『星の国から孫ふたり』が2005年5月17日、発行されました。

映画『老親ろうしん』が完成して5年後のことです。

原作者・門野さんは、お孫さん可愛さと、お孫さんのお世話のために、アメリカのバークレイと日本を行ったり来たり。そのお孫さんが二人とも、24時間目を離せない多動のオーティズム。もう星の国から来た王子様、お姫様と発想を変えるしかない。作家の好奇心とチャレンジ精神、そして子ども達の母の愛情深い自立心に支えられて、すくすく育っている。バークレイの進んだ特別支援体制があってこそ安心できる子育て環境がある。

23年間で6本の劇映画を取ってきた監督の槇坪夢鶴子は、病者や障害者が主人公の映画は撮りたくないと、心に決めていた。槇坪自身が長いリウマチで苦しみ入院を繰り返し、10年前から車椅子で障害者の仲間入り。当事者しかわからない痛み・苦しみ・悩みを、表現できない！と。

現在は、2週間に2日かけて輸血をしないと命が維持できない、さらに昨年9月より突然糖尿病になり1日4回のインシュリンを打たないといけない身体である。

また映画『老親ろうしん』、『母のいる場所』上映会で一緒に全国行脚をした認知症の母も、すでに2年前に他界。現在は槇坪自身がヘルパーの世話になって暮らしている。

入れ代わるように孫ができ、その世話に追われつつ、映画の企画製作で多忙を極める毎日。その中で、あらためて自分の命は多くの人に支えられ、生かされていると感じたと言う。

同時期、発達障害についての新聞記事を読み切り取り、テレビ番組を録画したり、インターネットで検索したり、門野さんからの情報提供もあって、次第に魅せられていく。

見たところどこが障害かわかりにくい発達障害、生まれつき脳機能に障害とばらつきがあり、人とのコミュニケーションがにがて、集中力がよわく多動であったり、こだわりが強く、場面転換によわく、想像力がにがてなのに、創造力豊かな絵を書いたり、とその症状は様々。

自分の障害を知ること難しく、自分の障害を伝えることも難しい子ども達。子育てに苦悩する親達に対する、世間の無関心と冷たい視線。

彼らを取り巻く現状を知れば知るほど、「何とかしなくては」と痛切に感じた槇坪は、多くの人に「自閉症」の理解を深めてもらう為、「自閉症」児と彼らの親達への支援・応援となるように、映画化に踏み切る。

発達障害支援法について

詳しくは検索、ダウンロード、お願いします。

文部科学省 発達障害支援法の施行について

○ 国及び地方公共団体の責務について

発達障害の症状の発現後できるだけ早期に発達支援を行うことが重要であるから、早期発見のための必要な措置を講じること。

○ 国民に対する普及及び啓発について

国、都道府県及び市町村は、発達障害については、障害を有していることが理解されずに困難を抱えている場合が多いことなどから、発達障害についての理解を深めることなどを国民の責務（第4条関係）と規定していることと併せて、具体的に発達障害に関する国民の理解を深めるための必要な広報及びその他の啓発活動を行うこと。（法第21条関係）

厚生労働省 発達障害者支援施策について

○ 国及び地方公共団体の責務

発達障害者の心理機能の適正な発達及び円滑な社会生活の促進のために症状の発現後できるだけ早期に発達支援を行うことが特に重要であることにかんがみ、早期発見のため必要な措置を講じるものとする。

○ 国民の責務

発達障害者の福祉について理解を深めるとともに、社会連帯の理念に基づき、協力するように努めなければならない。

○ 国民に対する普及及び啓発

国及び地方公共団体は、発達障害に関する国民の理解を深めるため、必要な広報その他の啓発活動を行うものとする。

出演者について

主人公弓子役の馬淵晴子さんは、前作『母のいる場所』で仕舞を舞い、脳出血で倒れ言葉も体も不自由でベッドの芝居で見事に介護される側のつらさを表現。

今回は作家の好奇心から、アフリカンダンスを覚え、可愛い孫の自閉症に巻き込まれながらも、愛情深く前向きにかかわっていく。暗くなりがちな映画の展開に、当事者に近い存在でありながら、涙を笑いに変え、家族を見守り支援していく姿は楽しみである。

娘の陽子役、加藤忍と夫・敏夫役、比留間由哲さんは、NHKの韓国ドラマ『春のワルツ』の声優でウノンとフィリップを演じ、悲恋(?)に終わった二人が、全くの偶然からこの映画で夫婦役、それも自閉症の子どもを二人抱え、果たしてこの家族はどう乗り切っていくのか。全国の『春のワルツ』ファンの期待も膨らむ予感がする。

若いカップル、ひとみ役の乾貴美子さんと拓也役のミョンジュさん。ともにドラマでの大役は初めて。ひとみはかおる(弓子の孫で自閉症)に会って、特別支援教育のプロになる。拓也はひとみに会って、会社をやめ障害児教育の道に進む。二人がスカイプで日米の発達障害の情報交換をする。若い人たちの共感を呼ぶのでは、と、期待される二人です。

友情出演される3人について

小林桂樹

小林桂樹さんは『老親』『母のいる場所』につづいて3作目。幼稚園の園長さんの役で出演、自閉症児のかおるの受け皿になって支援。実際に多くの発達障害児を受け入れている幼稚園で撮影。

紺野美沙子

紺野美沙子さんは『母のいる場所』につづいて2作目。かおるが通う小学校1年生の特別支援学級の担任。かおる達の個性に振り回されて、どんな先生が表現されるか楽しみ。

米倉齊加年

八百屋のおじさん役の米倉齊加年さん。『老親』『母のいる場所』につづいて3作目。地域の人の代表として、自閉症児のかおるにどのような支援が可能なのか。参考にできる。

監督を映画界に紹介した恩人です。1作目から映画を応援してくれた人。

【キャスト】

	太田 弓子	(60～63歳)	馬淵 晴子
弓子の娘	山崎 陽子	(28～31歳)	加藤 忍
陽子の夫	// 敏夫	(30～33歳)	比留間由哲
弓子の男孫	// かおる	(3歳)	小野 貴流
	//	(7歳)	小野 駿希
// 女孫	// らん	(3歳)	上野 楓恋
敏夫の母	山崎 政子	(70歳)	小笠原町子
弓子の息子	太田 拓也	(30～33歳)	ミョンジュ
スペシャルエデュケーション	村井ひとみ	(28～31歳)	乾 貴美子
	八百屋のおばさん	(55歳)	阿知波悟美
自閉症児	秋山 健太	(8歳)	山岸弦太郎
健太の母	// 道子	(35歳)	伊藤ゆきえ
アスペルガー症候群の転校生	加藤マリア	(7歳)	アシュリー・バーク

友情出演

幼稚園園長	高瀬 清	(80歳)	小林 桂樹
特別支援学級担任	木村 美里	(40歳)	紺野美沙子
	八百屋のおじさん	(70歳)	米倉斉加年

【スタッフ】

企画・製作・監督 槇坪多鶴子

原作 門野晴子

『星の国から孫ふたりーバークレーで育つ「自閉症」児ー』（岩波書店刊）

『ギフトィッド・チャイルド～「自閉症」児からの贈りもの～』（十月舎刊）

製作 光永 憲之

脚本 下島三重子

監修 市川 宏伸（東京都立梅ヶ丘病院院長）

星山 麻木（明星大学人文学部心理・教育学科教授）

撮影 伊藤 嘉宏

照明 林 和義

録音 高木 創

音楽 光永龍太郎

美術 和田 洋

【シノプシス】

5年前に夫に逝かれた、作家太田弓子（馬淵晴子・60歳）は自分一人の人生を満喫していた。娘の陽子（加藤忍・28歳）は結婚して、夫敏夫（比留間由哲・30歳）の赴任地、アメリカのバークレーにいます。陽子の兄、拓也（ミョンジュ・30歳）は自動車会社に勤めて8年、海外出張など忙しさに追われて、結婚もままならない。

ある日、弓子は図書館で資料のアフリカ関係の本を借りた帰り道、公園で、奇声を発しながらやってきた少年、健太（山岸弦太郎・8歳）を見かける。電車が来たのを見ようと飛び出した健太は、弓子にぶつかり、倒れてみ泣き叫ぶ。車が急ブレーキをかけて止まる。運転席から、「危ないじゃないか、気をつけろ！」と、罵声が飛ぶ。通行人の間をぬって飛び出した健太の母・道子（伊藤ゆきえ・35歳）は、回りの冷たい視線を避けるように、健太の手を取って路地に姿を消す。「あの子、自閉症らしいよ」と、通行人の声。

敏夫の東京への転勤に伴って、陽子と3歳になったかおるが帰国した。お腹に第二子がいる陽子たちは、弓子の家の近くのマンションに住むことに。娘の陽子は、かおる（小野貴流・3歳）を保育園に預けて仕事に復帰するつもりでいたが、コミュニケーションが取れない、おむつが取れない、言葉が遅いなど、と、手がかかったため、そのまま専業主婦に。仕事人間の夫、敏夫とは、子育てを巡って、けんかが絶えない。かおるが自閉症ではないかと心配する陽子に敏夫は、「しつけが出来てないのはお前の育児のせい」と、否定するだけだった。

かおるに久しぶりに会った弓子と拓也は互いに、かおるは自閉症ではないか、と密かに心配する。弓子に背中を押されて、陽子がかおるを病院に連れて行く。「自閉症」の診断がおりた。弓子の脳裏に浮かんだのは、公園で出会った少年、健太とその母道子の後ろ姿だった。世間から孤立したような二人。それを打ち消すように、「かおるはよその子とは違うかも知れないけど、発想は豊かだし・・・あの子は星の国から来た子どもなのよ。あなたはくよくよしないで、お腹の子を産みなさい」と、陽子を励ます弓子。しかし、敏夫の母、政子（小笠原町子・70歳）の「こんな子はうちの血筋にはいない」などの発言は、世間の差別を知るのに十分だった。陽子のお腹が大きくなるにつれて、弓子の出番が増えていった。こだわりの強いかおるに付き合っていくうちに、かおるの世界に少しずつ入って行くことが楽しくなった。「星の世界から来たんだから、地球の時間なんて、知るわけないよね」と、おおらかに構えていた。かおるを引き受けた幼稚園の園長、高瀬清（小林桂樹・80歳）との出会いも陽子や弓子を励ました。

陽子が女の子を無事出産する。らん、と名付けられた子は丸々と太って、元気そのものだった。バークレーから、村井ひとみ（乾貴美子・28歳）が休暇で帰国し、陽子の家にやってきた。バークレーの大学に留学中、時々、かおるのベビーシッターをしてくれたひとみは、今、スペシャルエデュケーションのスタッフとして、自閉症の子どもたちの教育にあたっている。「かおるくんと会って、自分がやるべきことが見つかったの。感謝しているわ。今度は私がお役に立つ番よ」と言うひとみは輝いていた。

プロの立場からのひとみの意見や情報は貴重だった。忙しい職場から、無理やり呼び出されて同席した拓也は、ひとみの生き方に魅かれた。インドなどの出張で感じていた、弱者を犠牲にした上に成り立つ経営論理への違和感。しばらくして、拓也は会社を辞め、障がい児教育の勉強を始めた。ここにもかおるの影響で、自分の生き方を見直した若者がいた。ひとみに恋をしたことも大きかったのだが。施設で働きながら、勉強する拓也は、パソコンや電話でひとみと連絡を取り続ける。その会話で、アメリカと日本の状況の違いを知る。

1歳半になったらんも、自閉症であると、診断される。かおる以上に多動ならんの子育てに疲れ、落ち込む陽子。励ます弓子。「未来を否定してどうするの？」
頑なに子供たちが自閉症であることを認めようとしなかった敏夫も、悩みながら奮闘する陽子の姿に、いつしか共に子育てをするようになる。

小学校の特別支援学級に入学したかおる（上野駿希・7歳）はある日、担任の木村美里（紺野美沙子・40歳）の呼び止めに応じず、学校を飛び出してしまう。近くの交番のおまわりさん、近所の商店街の八百屋さん（米倉齊加年・70歳）の機転で、無事発見。近所の人たちに、自閉症を、かおるを、らん（上野楓恋・3歳）を知ってもらうことの大事さを知り、弓子は『かおるとらんの星の子』通信を出し始める。陽子も自閉症の親の会に積極的に参加。言葉のなかったらんが、ボランティアのお兄さんと遊ぶことで、言葉を発するようになる。敏夫をはじめ、かおるやらんときちんと向き合うことで、みんなが変わってきた。

かおるのクラスに転校生がやって来た。アスペルガー症候群のマリア（アシュリーバーク・7歳）は、母親を亡くすという心の傷も抱えていた。自閉症は他人に関心を持たない、といわれているにも関わらず、マリアの心の傷を受け止めたのはかおるだった……。

終わり

【関係書籍】

原作 星の国から孫ふたり ーバークレーで育つ「自閉症」児ー

門野晴子 著

岩波書店刊

定価 1,785円（本体 1,700円 + 税）ISBN4-00-024755-7 C0036

ギフトィッド・チャイルド～「自閉症」児からの贈りもの～

門野晴子 著

十月舎刊

定価 1,890円（本体 1,800円 + 税）ISBN978-4-434-12796-0 C0036

著者略歴

1937年東京生まれ。ノンフィクション作家。

学校教育と子どもの問題、老人介護と福祉の問題などで執筆・講演活動を重ねている。

著書に『寝たきり婆あ猛語録』『寝たきり婆あ、たちあがる!!』（講談社）、

『老後は誰と暮らしたい?』（大和書房）、『おばあちゃんの孫育ち』（小学館）ほか多数。

映画『老親ろうしん』の原作者。